

羽化を体験して（チョウの飼育） 刈谷市立刈谷幼稚園（愛知県刈谷市）

【4歳児】

<幼児の姿と保育者の願い>

3歳時より、園内でダンゴ虫やアリやカタツムリなどを見付けては、親しんできた。虫に興味をもっている幼児が多く、毎日のように虫探しに出掛けたり、見付けてきては飼育ケースに入れて友達と見合ったりして楽しんでいる。「幼児が興味をもった虫を継続して飼育することで『すごい!』『不思議!』と様々な感動や発見をしたり、誕生や死などの体験を通して命を感じたり大切にしたりする子に育てて欲しい」と願い、園庭でA児が見付けてきた幼虫の飼育に取り組んだ。

<実践>「これでおなかいっぱい食べれるね」

6月8日

A児は自分の思いをあまり表に出さず、一人で遊ぶことが多かった。虫には大変興味をもっており、登園すると虫を探しに園庭に出て行く日が続いていた。

虫探しに出掛けたA児が色水遊びで使うパンジーのプランターの中に、黒にオレンジの斑点のついたチョウチョの幼虫を見付けた。「先生、こんなのがいた!」と嬉しそうに持ってきた。保育者も「青虫とは違うね」「珍しい幼虫だね」と不思議そうに見た。A児に「どうしたい?」と問いかけると「飼いたい!」と元気よく答えた。保育者も「そうだね。どんなチョウチョが生まれるか、飼ってみようか?」と期待して言うとうん」と嬉しそうに答えた。すぐに飼育ケースを用意した。A児が「先生、チョウチョの幼虫は何を食べるの?」と聞いてきたので、「その幼虫はどこにいたの?」と聞き返すと、「パンジーのお花のそこ」と答えた。「そっか。パンジーが好きなのかな?」と言うと、「パンジーのお花を取りにいこうよ」と勢いよく外へ出掛けた。A児はパンジーの花を遠慮がちに一つ採り、「先生、これでいい?」と見せる。「幼虫さん、大きくなってからたくさんあるといいかな?」と保育者が花をたくさんとって見せると「そうだね。たくさんあった方が嬉しいよね」と、ニコニコして摘み出した。自分でとったパンジーを飼育ケースに入れながらA児は「これでおなかいっぱい食べれるね」と嬉しそうに言って食べる様子を見ていた。



A児は毎日餌のパンジーを入れながら世話をし、三日後には、幼虫がサナギになった。「先生、チョウチョがくっついてる!」と登園してきたA児が見付けた。保育者は「サナギになったね。もうすぐチョウチョさんになるかな?」と、A児の思いに寄り添い、一緒に飼育ケースをのぞき込むと、周りにいた幼児も寄ってきて「見せて!見せて!」「面白いね」「早く、チョウチョになるといいね」と期待をもった。

「チョウチョさんはご飯がないとダメだもん。お花の近くがいいんじゃない」

6月18日

朝、保育者が保育室に行くとき羽化した状態でじっとしていた。幼児にどのような形で知らせようかと思っていたが自分で気付くことを待つようにした。

登園してくるとM児とT児が「あれ?」と大きな声で言い、ニコニコして保育者の所へ走ってきた。M児・T児「先生、チョウチョになってる!」保育者「わあ、本当だ。きれいなチョウチョだね!」と見ていると、登園してきた幼児が次々と寄って来た。

「ああ!チョウチョになった。すごおい!」「かわいいね」と口々に思いを出し、顔を見合わせて、嬉しそうに見たり、「ちょうちょ、ちょうちょ、なのはにとまれ~」と歌い出したりしていた。

その後、全体活動の時間にチョウチョをどうするか話し合った。「逃がしたくない」「だって、見たいもん」という幼児もいたが、多くの幼児が「狭くてかわいそう」「飛びたいって言ってるよ」と言い、「逃がしたくない」と思っていた幼児も「じゃあ、逃がそうか」と言った。保育者「逃がす所はどこにする?」と言うと、「ベランダがいいよ」「お野菜の所は?」と言っていたが、K児が「チョウチョさんはご飯がないとダメだもん。お花の近くがいいんじゃない」と言った。みんなは「あっ、そうか」と納得した。保育者が「お花はどんなお花でもいいかな?」と言い、A児が「パンジーだよ!」と元気に答えると、他の幼児も「だって、パンジーの所にいたもんね」「そうだったよ」と気付き、みんなで戸外に行き、パンジーの所で逃がした。

その後も、パンジーの中から幼虫を見付けて飼いはじめた。「餌はパンジーだよね」「前のチョウチョと同じだもんね」と、パンジーを飼育ケースいっぱいに入れて、「早くチョウチョになるといいね」と期待しながら世話を続けた。



<考察>

- ・ A児が見付けてきた幼虫に保育者も興味を示し、チョウチョのことを考えながら一緒に餌を探したり飼育の準備をしたりした。保育者が幼虫のことを思いながら言葉をかけたことでA児からも幼虫の気持ちになって答える言葉が出てきた。家庭ではなかなか体験できないことができる機会をつくったことで、幼虫からサナギ、そして、チョウチョへと変化していく自然の不思議さを感じたり、相手のことを思いながら考え行動したりすることができた。
- ・ 保育者とA児とだけのかかわりでなく、周りの幼児にも関心がもてるようにしていったことで、羽化の喜びを保育者とだけでなく、クラスの友達と共有したり、羽化したチョウチョをどうするか、みんなで話し合い逃がすことに決めたりして、クラスみんなで飼育し羽化という感動体験を共有することができた。そのことで、もっと飼おうと幼虫を見付けて持って来た。感動したことを伝え合える友達がいることは、より幼児の心を動かし、豊かにしていくのではないかと思った。
- ・ かなり大きくなった幼虫を見付けてきたので、サナギになるまでに3日、そして、羽化するまでに1週間程だった。4歳児にとっては興味が持続しやすく飼育するには適した昆虫であった。羽化を体験してから、再び飼育に取り組めたことで、「餌はパンジーだよ」「前のチョウチョと同じじゃん」と実体験から得たことを活かしながら、繰り返し体験することができた。前回の経験が活かされたという点でも、とてもよい教材であったと思う。保育者は幼児の興味の強さや持続するであろう期間等も考慮しながら教材として取り込んだり、幼児への働きかけ方を工夫したりしていくとよいことが分かった。

みどころ

自分で見付けた虫を飼うことで、4歳児なりに虫への親しみや愛情をもち、幼虫からサナギ、チョウチョへと変化していく自然の不思議さを感じ、相手のことを思いながら考えたり行動したりすることにつながりました。そのため、A児の姿や虫の存在は他の子どもたちの魅力的な環境になり、保育者の援助もあって、クラスみんなで飼育し羽化という感動体験を共有することにも、結び付いています。こうした感動体験により、豊かな学びになる経験を重ねています。